



# ふれあい ひびきあい 学び合い かがやくだけのごキッズ



## えだわんだより

横浜市立荏田東第一小学校

◆〒224-0006 横浜市都筑区荏田東三丁目5番1号

◆Tel…045-941-7630 Fax…045-942-9464

◆<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/edahigashi/>

6月



### その先にあるもの

学校長 熊谷 潤平

聞こえてくる「おお！すごい。」「ああ、だめだ……。失敗。」という元気な歓声に誘われ、外に出てみました。見れば、適度に距離を取りながら、友達が投げるソフトボールをうれしそうに待ち構える5年生の姿が。最後には担任教諭も、渾身の一投。子どもたちの笑顔が弾けます。

思えば昨年度は臨時休業があり、一切の「体力・運動能力調査」を、本校では実施することができませんでした。本年度は、身体接触をしたり激しい呼気が出たりする種目は避けつつ、部分的にはありますが実施できました。運動によって、すっきりした表情になっていく子どもたちを見ていると、私たち大人も、さわやかな気持ちになります。

校舎内では、2年生の子が、「先生、おれ、ソフトボール24メートル投げたよ！」とうれしそうに話しかけてくれました。「そう！大したものだなあ。2年生で24メートルも！」と私が返せば、「でも、〇〇ちゃんももっと投げたんだよ！」と、子どもらしい競争意識がちらり。(いいぞ。健全な「負けず嫌い」もまた生きる力の要素だよ。)と心の内につぶやきます。

競争といえば、先日、6年生の国際平和スピーチコンテスト代表選考会がありました。それぞれの学級から4名ずつ、計8名が、ジェンダーや貧困、SDGsなど様々なテーマでスピーチを披露してくれました。校長からの話のところでは、「精一杯準備をし、頑張った8名の代表の子はとても立派だった。でも、それを支えたのは、フロアにいる聴き手の君たちだよ。」と、背筋を伸ばし真剣に聴く6年生の態度を称えました。そして、「スピーチのその先」「コンテストのその先」を意識してほしいと願いつつ、「スピーチというのは、コンテストのためにするのではなく、人の心を動かすためにするものであること」「心が動けば、人の行動が変わり、行動が変われば社会が変わっていくこと」を付け加えました。

この日、プロ野球・ロッテマリーンズに所属する岩手の英雄、佐々木朗希投手が、プロ初勝利を上げたことをニュースで知りました。インタビューから、初勝利の記念ボールは誰にあげたいかを聞かれ、彼は「両親です。」と答えていました。ご存じの方も多いかもかもしれませんが、彼はお父さんを東日本大震災で亡くしています。その彼が、何もなかったように、「天国の父に」でもなく、「今も応援してくれる母に」でもなく、淡々と、「両親」と答えたのです。なんて清い感性。なんて温かい人間性。この選手は、もし仮に163キロという剛速球を天から取り上げられたとしても、いずれいつか訪れる引退の日がやってきても、佐々木朗希という一人の人間として立派な生き様を見せるに違いない。そう思いました。

子どもたちは、スピーチコンテストで一番になること、かけっこでより速く走ること、テストでより高い点数を取ること、目指す高校・大学に入ること、夢だった職業に就くこと…など、これからも向上心・競争心をもって、目の前の目標に全力で取り組んでいくことでしょう。そうした姿勢は、とても大切に尊く、私たちもぜひ応援したいところです。しかし、人生は、目指す「何かになる」ことで終わりではありません。目標としていた何かになったその先の、「何をなすか」「どう生きるか」というところにこそ、その人の本質が現れます。163キロの速球を投げられる佐々木投手はとても魅力的ですが、あの「両親です。」と答えられる佐々木青年の資質・感性は、すばらしい剛速球以上に私たちの心を打ち、動かします。

「えだわん」の子たちよ、大いに知識・技能を身に付けよ。しかし、それらの輝きに負けない感性・資質こそ磨け。一方で、我々教職員もまた、「学校の先生」になって終わりではない。「先生」として何を成すか、こそが勝負なのだ…。

謙虚さと感謝の心をあわせもつ、若い佐々木選手の姿と言葉が、そう教えてくれます。